

# 「協働的」な学級経営と組織づくり — 教職大学院の学びから見てきたもの —

山 崎 優 寺 田 光 宏  
岐阜聖徳学園大学附属小学校 岐阜聖徳学園大学教育学部

## Collaborative Class Management and Organization Creation: What Could be Learned from Teacher Education Graduate School

Suguru YAMAZAKI, Mitsuhiro TERADA

キーワード：協働 学級経営 組織づくり 対話 相似形

### I. 実践研究の背景と目的

#### 1. はじめに

「子どもの学びと教員の学びは相似形であること」<sup>1)</sup>

筆者が、2021年度から通っている福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院（以下、福井大学教職大学院と省略）でよく耳にする言葉である。「協働探究」や「実践コミュニティ」というキーワードも頻繁に取り上げられ、現学習指導要領が重視する「個別最適な学びと協働的な学び」について学びを深めている。

2020年から猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症であるが、2022年度も変わらず社会生活に多大な影響を与えている。それらは当然、学校現場にも影響を与え、子どもたちの学習や生活スタイルにも大きな変化をもたらしている。その最たるものが、「協働学習」である。

そこで本論では、筆者が勤務する岐阜聖徳学園大学附属小学校（以下、本校と省略）での実践の取り組みを「協働」に焦点を当て、学級経営について省察し、そこから見てきた成果と課題を「協働的な組織づくり」を育むための実践として記しておきたい。

#### 2. 主題設定の理由

##### (1) 子どもの実態

新型コロナウイルス感染症によって、これまで当たり前だったことが当たり前でなくなった。どの学校でもマスクの着用、手洗いと手指の消毒など感染対策を十分に講じての学校運営を行っている。机の配置もそうである。密にならないように隣と一定の距離と開けて机列したり、給食も前方を向いて黙食したりするなどこれまでとは違った新しい生活様式で子どもたちは学校生活を送っている、授業でも同じである。ペア学習やグループ学習などこれまでできた「協働的な学び」に制限がかかり、新型コロナウイルス感染症対策を優先しているのが現状である。

学校で感染者が出ると臨時休校になったり、学級閉鎖になったりしてオンライン授業へシフトすることもあった。本校でも、2021年度は2回の臨時休校を余儀なくされた。オンライン授業での子どもたちは、自宅からパソコンやタブレットの画面に向かって、授業の様子を見るが多く、一方向でのやりとりが多かった。子どもたちの声としては、「友達と話したい」「自分の考えを言って仲間から意見をもらいたい」というものが多かった。それらを解消するために山崎(2022)<sup>2)</sup>のような実践を引き続き行った。そこから見てきたことは、子どもたちは「仲間と何かを成し遂げたい」「仲間と協働して学習したい」という思いを持っているということであった。そのような子どもたちの姿から、学校における授業や集団生活でも「協働的」に活動できる場が必要だと考えた。

## (2) 願う子どもの姿

2021年1月下旬、本校で2度目の臨時休校が行われた。新型コロナウイルス感染症拡大の第6波の影響を受け、全校が自宅からのオンライン授業へと変更を余儀なくされた。本校の子どもたちにとっては初めての完全なオンライン授業であったのだ。1回目のオンライン授業の時にはオンラインを受ける児童と登校して授業を受ける児童に分け、ハイブリット型の登校を行っていた。今回は、子どもたちが完全に自宅からオンラインを行ったのだ。

「やっぱり画面より直接会って話したり、授業したりする方が楽しいね」

オンラインを終え、初めての登校日の子どもたちの一言である。子どもたちなりにオンライン授業に対して思うことがあったのだろう。このような姿を見て、学校で学ぶ意義について著者は考えさせられた。「オンラインでの学びと対面での学びは何が違うのか」と職場でも同僚と議論することもあった。子どもたちにとって学校での学びの根幹にはやはり「仲間」の存在が大きいのではないかと考えた。

新型コロナウイルス感染症によって大きく変わった子どもたちの学校生活であるが、子どもたちには、学校生活の中で関わる「学級の仲間」あるいは「学年・異学年の仲間」と協働して学びを歩んでほしいと願っている。そこで、本研究ではこれらの点も踏まえ、子どもたちの姿から仮説検証を行うことで、手立ての有効性を明らかにしていきたいと思う。

## II. 実践研究の方法

筆者は、福井大学教職大学院で『コミュニティ・オブ・プラクティス』<sup>3)</sup>と『学習する組織』<sup>4)</sup>の2つの理論書に触れた。いずれの書籍も企業を舞台にした組織マネジメントに関するものであったが、その内容は企業だけに留まらず、学校現場にも共通する理論であった。特に『学習する組織』においては、組織内での学習するコミュニティの在り方についての方法が示されていた。下記の表は『学習する組織』の中で示されていた「学習する組織のディシプリン」を筆者がまとめたものである。下記の表を作成するにあたり『マンガでやさしくわかる学習する組織』<sup>5)</sup>も参考にした。

表1 学習する組織のディシプリン（書籍を基に筆者が作成）

<p>&lt;学習する組織の5つのディシプリン&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・システム思考 現実の複雑性を理解し、望ましい変化を起こすために、物事のつながりや全体像を見て、その本質について考える</li><li>・自己マスタリー 人生において自分が本当に求めている結果を生み出すために、自身の能力と意識を絶えず伸ばし続ける</li><li>・メンタル・モデル 私たちの頭の中にさまざまな人や物事についてのモデルがあり、それらを使って状況について行動したり解釈したりしている</li><li>・共有ビジョン 組織のメンバーが共有して抱く未来への憧憬</li><li>・チーム学習 グループで一緒に、探求、考察、内省を行うことで、自分たちの意識と能力を共同で高める</li></ul>
--

そこで本論では、「自己マスタリー」・「共有ビジョン」・「チーム学習」の視点を活用し、本校での実践の取り組みとそこでの成果と課題を省察する。また、筆者が学ぶ福井大学教職大学院での学びとの関連性についても考察を行うこととする。成果と課題については、子どもたちの発言、作品やノートの記述を分析し、児童や保護者へのアンケートや感想をもとに省察していくこととする。

### Ⅲ. 実践内容の詳細

#### 1. 実践① 自分のビジョンをクラスの共有ビジョンに～「共有ビジョン」・「自己マスター」～

筆者は、2022年度は4年生の学級担任を仰せつかっている。この学年の子どもたちは2021年度も学級担任をしており、持ち上がりとなった。2021年度の反省として筆者自身が子どもたちの学びを牽引し、子ども主体の学級経営とは必ずしも言えないと感じた。そこで2022年度は子どもたちの思いを中心に子どもたちが「自分たちで学校生活をつくる」をテーマとして学級経営を行っている。

その中で大切にしていることは、毎月の「目標作りと振り返り」である。図1と図2は児童が毎月作成している目標と振り返りである。これらは児童一人ひとりが所持しているタブレット端末 iPad（以下 iPad と省略）の授業支援アプリ「MetaMoji Classroom」（以下、メタモジと省略）で作成している。

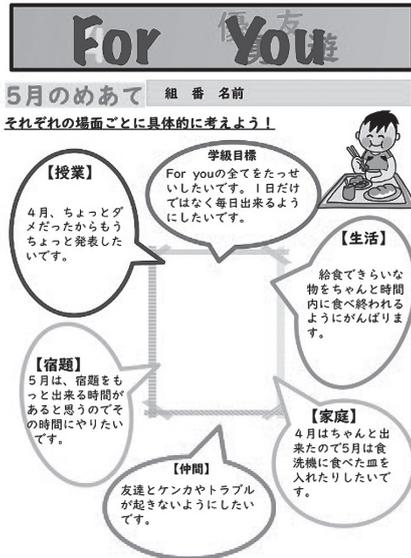


図1 児童が作成した毎月の個人目標

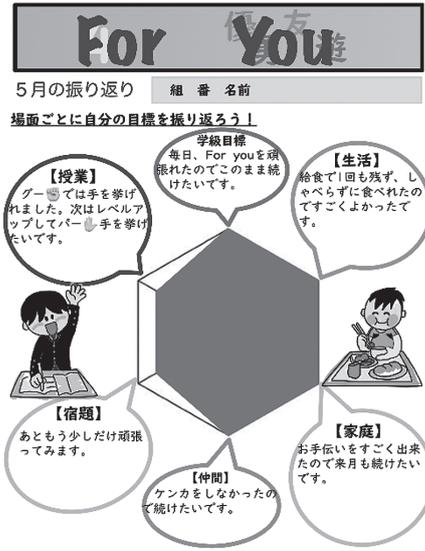


図2 児童が作成した毎月の個人の振り返り

ここでは、「学級目標」「生活面」「家庭」「仲間」「宿題」「授業面」の6つの観点で細かく目標を設定し、自分の目指すべき姿を明確にしている。これらの軸になっているのは、4月に設定した「5年生までになりたい自分」である。その姿の実現に向けて、毎月の目標を自ら設定している。また、その取り組みについて図2のように毎月振り返りを行い、チャートにして視覚化している。このチャートは自分の目標に対して5段階で評価している。目標を達成するほど正六角形に近づく。子どもたちの評価はまちまちであり、自分を厳しく評価する児童もいる。これらの目標は教室の後方にある背面掲示板に掲示し、クラスで共有するようにしている。



図3 教室背面の個人目標の掲示

この個人の目標や振り返りをもとに、クラスの毎月の目標を設定している。『学習する組織』の中でセンゲは、「自己マスターというディシプリンは、継続的に私たちの個人ビジョンを明確にし、それを深めることであり、エネルギーを集中させること、忍耐力をつけること、そして、現実を客観的に見ることである。したがって、自己マスターは学習する組織の欠かすことのできない要—学習する組織の精神的基盤—である」と述べている。つまり、この個人のビジョンの上に組織のビジョンが成り立つのであり、学級で言えば子どもたち一人ひとりの目標が学級全体の共通の目標の基盤となると捉えることができるであろう。

毎月の目標を設定する学級会でも、子どもたちは「先月は〇〇ができなかったから今月も続けたい」「クラスの中で、時間を意識した行動ができていない子が多かったから2分前行動しよう」など子どもたち自身で課題を出し合い、クラスの目標を設定する姿が見られている。

## 2. 実践② 「協働」を意識した係活動 ～「チーム学習」～

筆者は、係活動こそ「協働学習」においては最たる場面であると考え。それは、子どもたちが自分たちの学校生活についてより良くしようと前向きに活動する場面であると考えからである。自分たちの学校生活を楽しく過ごしたい、学級や学校のためにできることはないか仲間できることはないかと活動する姿からも「協働」の姿勢が伝わってくる。

筆者の学級でも、たくさんの係活動が現在も行われている。学級活動（学活、本校では「はぐくみ」と呼び、以下はぐくみと省略）の時間に毎月必ず「係活動の時間」を設けている。そこでは、子どもたちが係ごとに学級の課題や状態を図4のように議論している。どのような活動をすればみんなが楽しく生活できるのかを全員が意見を出し合っている。図4の係は「教科係」の活動の様子である。「教科係」では、4月からの学級の様子を見て、次の授業の準備がなかなかできていないことに課題を感じていたようである。以下はその時の話し合いの会話である。



図4 係活動中のチーム学習の様子

女児A：4・5月の様子を見てみると、授業が終わるとみんなすぐに遊んじゃうよね。  
男児B：わかる、わかる。それ僕も思っていたんだよね。  
女児C：でもできている子もいるよね。どうしたら全員が次の授業の準備をしっかりとってくれるかな。  
女児D：係でキャンペーンをやって、チャックシートを作ってやるのはどうかな。  
男児B：なるほど！それいいね。でもどんなキャンペーンにする？  
女児A：2分前に次の準備をして、着席していたらシートにチェックするのはどう？  
女児C：それならできそう！みんなもやってくれそうだね。  
女児D：でもキャンペーンが終わっても続けられるようにしたいよね…。

この話し合いは6月の係活動での様子であるが、このあとこの係は業間休みや自宅での時間を使って、チャックシートを作成し1ヶ月間の「授業の準備キャンペーン」を実施したのである。学級の子どもたちにそのことを伝え、取り組みに協力してほしい旨を伝えていた。ここでのポイントは「学級全員を強制しない」ところにあった。強制的に行うことが目的ではなく、キャンペーン後も学級の仲間が自主的に続けていこうとすることを目的にしていたようであった。

キャンペーン中の係の子どもたちは、常に学級に呼びかけを行っていた。その結果、学級の全児童が目標としていた2分前に次の授業の準備を行うことができた。その中でも、取り組みを頑張っていた児童を係が図5のように表彰して価値づけを行っていた。キャンペーン終了後も、子どもたちが準備を意識した取り組みが継続できている。これらの姿は教師から課せられているものではなく、子どもたちが考え、子どもたちが仲間と協働して作りあげた姿ではないだろうか。



図5 係による表彰式の様子

## IV. 実践の成果と課題

### 1. 「協働」を意識した学級経営と組織づくりの成果

以下に、本実践を通じた成果を児童へのアンケートや児童から寄せられた意見を基に記す。以下は筆者が担任する児童 32 名に行ったアンケートの結果である。

表2 毎月の目標や振り返り、係活動に関するアンケート

質問事項	はい・ある・参考になる 仲間と学習一緒に学習	よい	ない・いいえ・恥ずかしい 一人で学習
1. メタモジを使って毎月の目標立てることに最初は難しいと感じていましたか？	50% (16名)		50% (16名)
2. 毎月の目標やふりかえりをクラスの仲間に見てもらうことはどう思いますか？	50% (16名)	34.4% (11名)	15.6% (5名)
3. 仲間の目標やふりかえりを参考に自分の目標やふりかえりを書いたことがありますか？	75% (24名)		25% (8名)
4. 係活動は楽しいですか？	96.9% (31名)		3.1% (1名)
5. 質問4で答えた理由を書いてください。	<p>・楽しい係活動をしているから。・いろいろなことができるから。・自分が好きなことだから。・沢山の色々なことができるから。・仲間と協力して進めていけるから。・自分の好きな係ができるから楽しい。・前からやりたかった仕事でちょっと苦戦することはあるけど仲間と関わってできて楽しいです。・キャンペーンなどをやると楽しいから。・係活動でイベントができるから。考えるのが好き(ゲーム係だから)・二つ目の係はクイズ係で色々なクイズを探してみたり、できるからです。・みんなが明るいのでいつでも楽しい!・プリントを作ったり、いろいろアイデアを出すのが楽しい。・仲間と一緒に仕事をするから。・自分がやりたいと思った係ができたから。・掲示は、みんなの思い出を掲示できるので思い出せて楽しいです。・係みんなで協力出来るから。学校で学ぶ事だけでなく協力して活動出来るから。・友達と協力してできるから。自分と違う意見を持っているから。・いろいろなキャンペーンをしてクラスをより良くしているような気がするからです。・仲間と一緒に活動することがとても楽しく、仲間と一緒に活動することからいろいろなことに繋がっていくと思うからです。・係活動で仲間といっぱい話し合えることが楽しい。・自分が作った係だからやりがいがある。・みんなで遊びを考え作り遊んでもらうから。・みんなで仲良く運動ができたからです。・友達と一緒に折り紙を教えてあげたりできるから。・仲間と協力していろいろなことができるから。・一人だと寂しいし、ほぼやることがないから。・いつもみんなの為に働いてる気がするからです。・今のところトラブルが何も起きていないので楽しいです。・みんなを楽ませるためにいろいろな活動ができるから。・毎回、日付と題名を書くのは大変だけど、友達と仲良くできるから。</p>		
6. 学習などで仲間と一緒に活動することは楽しいですか？	100% (32名)		0% (0名)
7. 質問6で答えた理由を書いてください。	<p>・仲間と話したりするのが楽しいからです。・仲が深まる気がするから。・みんなと交流できるから。・一人は、寂しいけど仲間とやると、すごく楽しいから。・一人だとアイデアとかはあまり出ないし楽しい。・仲間は色々個性を持っていて色々案が出て楽しい。・仲がいい子とずっと入れるから。・たまに喧嘩が起きるけど遊んだりするのが楽しいから。・仲間がいると心強い。・一緒に仲間と活動すると仲間の意見やアイデアが知れて参考にできるかも知れないからです。・楽しい。・いろんな意見がでたりするから</p>		

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間がいると安心するから。・わたしの係は1人だけど、手伝ってくれる人がいるからです。・いろいろな意見が出てきて、楽しいし、仲間と協力できるからです。・友達同士で協力出来るから。・1人の時より色々なアイデアが出て、協力できるからです。・仲間と活動していると心強さが湧くからです。・係活動で仲間といっぱい話し合えることが楽しい。・仲間と活動すると自分が思いつかなかったことを仲間が思いつくことがあるから。・話し合い友達をつくって一緒に遊ぶから。・仲間といるとみんなとお話しなどができるからです。・僕は、1人が嫌いだから。・皆と協力しあって活動するのが楽しいです</li> </ul>		
8. 一人で学習する時間と仲間と一緒に学習する時間ではどちらが楽しく感じますか？	84.4% (27名)		15.6% (5名)
9. 質問8で答えた理由を書いてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間と話せるからです。・いろいろな意見が出て楽しいから。</li> <li>・仲間がいるとやる気が出るから。・色々な話もできて、楽しく勉強や宿題ができるから。・仲間の方が楽しいから。・楽しいし意見も沢山出てここが間違っていたのかと分かるからいい。・色々な意見が出て楽しい。いろいろな考えがあるから。・仲間の考えが参考になるから。・仲間の考えが参加になる。・相談したり、仲間の意見が知れたりするからです。・仲間と一緒にやると違う理由が出たりして楽しいから！・友達といっぱい話せるから。・仲間の意見を聞くことができるから。</li> <li>・集中してできるから。・仲間としたら話しかけてきたり、話しちゃうから集中がとぎれるからです。・1人で集中出来るから。・他の人と比べられるから。</li> </ul>		

### (1) 実践①の成果

子どもたちにとって自分の目標やめあてを仲間と共有することに、初めは抵抗があったようだ。子どもたちへのアンケートを見てもそれがよくわかる。クラスの半分の子どもたちが、初めは目標を立てることが難しく、また一部の児童は掲示することにも恥ずかしさを感じていた。

しかし、クラスの4分の3の子どもたちが仲間の目標や振り返りを参考に、自分の目標や振り返りを書いている。仲間の書いたものに刺激を受け、仲間を頼りに学んでいると言えるのではないだろうか。決して教師が指示するのではなく、子どもたちが自ら仲間から学ぶ姿こそ「本当の学び」の姿であると感じた子どもたちの姿であった。

### (2) 実践②の成果

筆者は、福井大学教職大学院で学ぶまで子どもたちに全てを任せるということには抵抗を感じていた。それは、子どもたちに失敗させたくない、難なく日常が送れるようにしてあげたいという思いが強かったからだ。しかし、この実践を通して、子どもたちにはどんどんチャレンジする機会を作り、失敗しても仲間とそれを乗り越える力が必要だということに気が付き始めた。「レジリエンス」という言葉を耳にする機会が多くなり、子どもたちにとって重要な力の一つだと感じた。この実践をしている最中、複数の児童から次のような言葉を耳にすることが多かった。

「どうやったら課題がクリアできるかな？みんなどう思う？」

「〇〇君のアイデアを生かそう」

「私はこう考えるけど、みんなはどう？」

「先生、仲間と一緒に考えるのって楽しいですね」

「失敗してもまたやってみていいですか？」

どの言葉にも前向きな気持ちが存在していることと、「仲間」と一緒に何かとやりたい、やろうとする気持ちが存在している。上記のアンケート結果を見ても、子どもたちの意識の中には「仲間」の存在が大きいことがよく分かる。質問に対して理由の回答を見ても、「仲間」の文字が多く見受けられることから明らかである。また質問6に対しての回答がクラス全員「仲間と一緒に活動することが楽しい」と言う点からも、子どもたちは仲間と一緒に学習したり、活動したりすることを楽しいと

感じている。また、質問4で唯一「係活動が楽しくない」と答えた児童の理由を見てみると、「一人だと寂しいし、ほぼやることがないから」と答えているように、やはり一人よりも仲間と一緒に活動したいことが感じられる。

この子どもたちの姿こそ「協働的に学ぶ礎」となる要素であるように考える。そういった意味でも本実践での子どもたちの成長には感心させられた。

## 2. 「協働的な組織の運営」の課題と今後の課題

次に、「協働的」な学級経営と組織づくりにおける課題と今後の課題を記す。

### (1) 信頼関係の構築と児童理解

先のアンケート結果の中には、仲間との学習よりも一人の学習の方が楽しいという子どもたちもいることを忘れてはいけない。その子たちの理由を見てみると、「一人の方が集中できる」「みんなとやるとうるさく、騒がしくなってしまう」「嫌いな子とグループになると楽しくない」などが見られた。そこには教師の児童理解と子どもたちの同士の信頼関係が改めて必要なことが再認識できた。

すべてが協働的な学習で成り立つわけではなく、単元や活動内容などを見極め、子どもたちにとって何が適切な方法かを見定める児童理解と、子どもたち同士が信頼関係を構築できる実践を継続していくことが重要であると感じた。特に実践②の係活動のように、信頼できる仲間との協働こそ子どもたちの意欲的な活動を生み出すように感じる。

### (2) ビジョンの共有とチーム学習の重要性

グループ学習や係活動などでも「何をするのか」「何を目指すのか」と言ったビジョンを仲間と共有することは重要である。特に学習面でのグループ学習では「ねらいや課題」がグループで明確になっていないと活動が停滞してしまう。そのような状態に陥らないようにするには、日ごろから子どもたちに積極的にチームで活動する習慣をつけ、ねらいや目的を仲間と共有することを経験させることが大切ではないだろうか。学校生活ではそのような場面は多々ある。教師が意図的に活動を仕組み、子どもたちの「協働」意識を育てていくことが必要であると考えてるので、今後はより一層の工夫を検討していきたい。

## V. 終わりに

2021年度から福井大学教職大学で学び1年半を過ぎようとしている。新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインで学ぶ機会が多いが、それでも他県の多くの先生方との対話は筆者にとっては非常に刺激的な場となっている。どの先生方とお話しさせていただいても共通しているのは「教師はティーチャーではなくファシリテーター、コーディネーターである」ということである。「個別最適な学び・協働的な学び」が重視される中で、教師の役割は子どもたちの学びに寄り添う「伴走者」のような立場であろう。本実践での子どもたちのように、チャレンジすること、学び続けることを仲間と一緒に楽しくしている様子を間近で見ていると、私たち教師が子どもたちにできることは「学び続けること」なのかもしれない。

「令和の日本型教育を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」<sup>6)</sup>の中に「主体的に学び続ける教師の姿を目にすることで、自らも主体的に学び続ける意欲を子供たちが培うことが期待できる」と記述もされている。これからの学校での教師の役割も今、転換期を迎えているのかもしれない。

「子どもの学びと教員の学びは相似形」であるように、子どもたちに主体的で対話的な深い学びを求める以上教師も同じように、主体的で対話的な教師集団や組織であるべきなのであろう。筆者の福井大学教職大学院での学びも残り半年となっているが、「学び続ける教師」であれるよう、これらも子どもたちとともに実践を積み重ねていきたい。

## 注・文献

- 1) 秋田喜代美・福井大学教育学部附属義務教育学校研究会 (2018) : 「福井発 プロジェクト型学習ー未来を創る子どもたちー」, 東洋館出版社, 204.
- 2) 山崎優・寺田光宏 (2022) : 子どもの協働と教師の協働ーオンライン授業と ICT 活用の実践を通して見えてきたものー, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要第 21 号.
- 3) ウェンガー, E. 他 (2002) : 「コミュニティ・オブ・プラクティス」(桜井祐子訳), 翔泳社.
- 4) ピーター・M・センゲ (2011) : 「学習する組織」(枝廣淳子他訳), 英治出版株式会社.
- 5) 小田理一郎 (2017) : 「マンガでやさしくわかる学習する組織」, 日本能率協会マネジメントセンター.
- 6) 文部科学省中央教育審議会 (2021) : 「「令和の日本型教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて (審議まとめ) <要約版>」, 文部科学省, 3.